提言

～子どもたちに笑顔あふれる未来を～

「パズル」

一つ一つのピースはちがう
丸いピース　角ばったピース
中心のピース　端のピース
一つ一つ違う　一つでも欠けたら完成しない
そして全てのピースが集まったとき　ピースサインがあふれ
ピース　すなわち「平和」が生まれる

熊本市教育長
遠藤　洋路 さん

これは、熊本市教育委員会が毎年作成し、熊本市内の小中学校・幼稚園等に配布している人権カレンダーに掲載された中学一年生の作品です。人にはみんな違いがあります。違うことは悪いことではなく、むしろ当然のことであり、それぞれが大切な社会の構成員だと作者は言うのです。きっと、この作者である生徒のまわりでは、一人ひとりに自分の個性にあった役割があり、その力をみんなのために発揮できる環境が整えられているのだろうと想像します。学校や地域で、子どもたちが自分の力を発揮し笑顔で過ごす姿は、人権教育が目指す姿であり、すべての教育活動を通して培っていくものです。

しかし、子どもたちを取り巻く状況は、虐待・いじめ・不登校など、厳しい状況にあります。家庭・社会教育力の低下、学校教職員の多忙化などの問題もその背景に存在しています。そんな状況を改善していくためには、人権教育を根幹にした様々な取組が必要です。

２００８年（Ｈ20年）に、国から「人権教育の指導方法等の在り方について『第三次とりまとめ』」が出され、それを受けて本市では２００９年（Ｈ21年）に「熊本市人権教育・啓発基本計画」を策定し、２０１４年（Ｈ26年）に改訂を行っています。また２００９年（Ｈ21年）、そして昨年の２０１８年（Ｈ30年）に「熊本市人権教育の推進について」を改訂し、学校教育・社会教育を通じて、差別の現実に学ぶという姿勢を大切にしながら、すべての人の人権が尊重されるための人権教育を推進しているところです。

このような人権教育に関する施策とともに、子どもたちが安心して自分の思いを発信できるようにするには、身近なおとながまず人権に関する基本的認識を確立し、人権感覚をしっかりと磨いていくことが不可欠だと考えます。小学生の頃、私には大切にしていた「岸田君」という友だちがいました。私は彼を「きしくん」と呼んでいました。その彼が、ご家庭の事情で、親戚に引き取られ転校することになりました。別れに際し、クラス全員で手紙を書くことになったとき、私は手紙に「きしくん」と書きました。すると、担任の先生が、習った漢字で書くようにと、赤ペンで「岸君」と直されたのです。私にとって彼は、親しみを込めて呼んでいたひらがなの柔らかい「きしくん」であり「岸君」ではなかったのに。その時の思いはずっと心の中に残っています。子どもたちにしっかり寄り添い、一人ひとりの言葉や行動の奥にある思いや生活背景を理解することは、本市が目指す人権尊重の視点に立った学校づくりの土台であると強く思う理由がここにあります。

そうであるからこそ、子どもたちの「笑顔あふれる未来」を見据えて、今私たちおとなにできることは何か、学校は何をすべきかを真剣に考え、未来へ新しい風を吹きこむべく、熊本市の教育の推進・人権教育の推進に努めてまいりたいと思います。